
光速で進化を遂げる彼女、僕はただの残像にすぎない

四季 ワタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光速で進化を遂げる彼女、僕はただの残像にすぎない

【Nコード】

N5514B

【作者名】

四季 ワタリ

【あらすじ】

八月の下旬、夏の終わり。公園の木の下に転がる生物の死骸。ブランドコを漕ぐ、天才と凡人。僕はただ取り残されていた。

地面に落ちている生物の茶色い羽が、夕日の光に反射して金色に輝いているように見える。一個、二個、三個。大きな杉の木の下にその生物はたくさん転がっていた。そのどれもが石のように固まって、動く気配がまったくない。季節は夏が去ろうと支度を始めた八月の下旬。暑さはまだまだ残っていたが、生物たちは着々と目的を遂行し終わりを迎えていった。

キィキィと、ブランコの軋む音が隣りから聞こえてくる。それと一緒に仄かな甘い香りが漂い、僕の鼻をくすぐった。香水の香りだ。「香水、付けるようになったんだ」

少し驚いた口調で僕は隣りに顔を向け聞いてみた。でも、返事は返って来なかった。彼女は肩まで掛かるぐらいの髪を風に流しながら、ブランコを漕ぎ続けていた。その瞳は僕とは違い、遠い、遥か彼方を見つめているようにみえる。彼女のいるところに、僕は絶対に届かない。心の中で恐怖と絶望がない交ぜになった感情が沸き上がる。

キィ、キィ。無言の二人きりの公園内で、ただ彼女のブランコを漕ぐ音だけが悲しく響き渡っていた。僕が横を向いても見向きもしない。完全に無反応だった。瞳はジッと遠くを見据えたままで、その中に僕の姿は映し出されていなかった。

溜息がこぼれた。やるせなさを隠すかのように視点を彼女から公園の中央にある大きな杉の木に移す。葉の間からは夕日が顔を覗かせている。

また視点を移す。

今度は木の下への辺りを観察した。そこには空になった飲料水の缶が二つと茶色の物体数個が転々と転がっていた。目を細めその物体が何なのかを確認しようとしたが途中で中断される。ちょうどその

物体と同じものであろうものが、上空から落ちてきたからである。
光に反射して輝くそれを僕は手にとって確かめた。

「セミか……」

黒い胴体に茶色の羽。セミの中でもアブラゼミと呼ばれている種類のものであった。ひっくり返しお腹の方を観察する。腹弁と呼ばれる部分が結構大きいことからオスだと判断した。特有のジリジリとした鳴き声は発していない。六本の足を微かに動かすのが精一杯という感じだった。

「かわいそうに……」

死にかけのセミを見ながら口から漏れた言葉。哀れみの感情がこもっている久しぶりの言葉だった、と後になって気付いた。哀れみ？ なぜ僕は可哀相などと思ったのだろう。夏も終わりに近付いているのだから、当然セミも死んでいく。自然の法則に従って。なぜ感傷的になったのだろう。僕の思考は少しずつ加速していく。

「無駄なことを考えるようになったのね」

突然の声に僕はドキツとする。思考は遮断され神経が隣りに座る声の主に注がれた。彼女の瞳は僕の瞳を捕らえ、瞬きもせず、一心に見つめていた。僕の全ての思考が一瞬にして読み取られた、と思ひ驚きとともに彼女のことが恐いと感じた。

「僕の思考が読み取れるようになったのか」

「ええ。でもあなただけではいね。全ての人の思考が手にとるようにわかるの」

「そうか……」

遠い、果てしなく遠い場所に彼女がいる。そう思えてならなかった。隣りに、手を伸ばせば触れ合える距離にいるのに触れることはできない。彼女の躰は僕と同じ空間に存在しているのに、内側は誰も知ることの出来ない未来を眺めている。彼女の脳内ははたしてどんな夢を見ているのだろうか？

僕はセミを大きな杉の木の下に置いたためブランコを離れた。彼女はその行動を不思議そうに目を細めながら眺めていた。木の幹の辺

りでしゃがみこみ、セミを地面に放つ。しかし、すでに命の灯火は消えかけていた。足も動かなくなってしまった。

キィというブランコの漕ぐ音が止まるのがわかった。代わりに砂を踏む靴の音が僕の背中に向かって近付いてくる。

「不思議なことをするのね。最後は仲間と一緒に、というあなたなりの心遣いかしら」

その声は過去の彼女から考えられないほど冷たく、機械的なものだった。僕はチクチクと突き刺さるような痛みを抑え、後ろを振り返りその言葉を肯定するように穏やかに微笑んだ。彼女は何も言わずセミの死骸を一瞥し、その後視点を公園の隅にある花壇へと漂わせた。

「虫も花もそう。目的を果たすとただ死んでいくだけ……」

「目的？ 子孫を残すと言うこと？」

「そう。個から個を誕生させ、自分から切り離し、生まれたと認識すると、後は死んでいくのを待つだけ……。それが循環だと信じているから。そして彼らはそれを望んでいる」

彼女は空を見上げた。オレンジ色に染まる空を一点の雲無く見つめる瞳は、夢幻に輝いているように僕にはみえた。その瞳に吸い込まれたら、どれだけこの気持ちになるだろうか、とおもわず考えてしまう。

「いえ、彼らだけではないわ。生きている全ての生物は循環を望んでいる。もちろん、私たち人間も。でも……」

「でも……？」

「子孫を生んでも、人は、まだ生き続けようとする。不思議だと思わない？」

「……僕には君が言いたい事の意味が、あまり理解できない」

「それは違う。あなたは理解しようとしていないだけ」

どこかの木からヒグラシの鳴き声が聞こえてきた。二人は黙ったままだった。夕日がだんだんと傾き出し、夜の闇が迫り来ようとしている。貴重な時間は瞬く間に過ぎ去るものだと思認識した。彼女

の迎えが来る時間だった。

「楽しかったわ、あなたと話せて」

「僕もだよ。ありがとう」

「ありがとう？ なぜそんなこと言うの？」

「なんでだろう……。僕が君を見て、満たされたからだと思う」

公園の入口には黒い高級外車が止まっていた。彼女を迎えに来たある研究施設の車だった。前方の運転席から黒いスーツにサングラスをかけた男がドアを開け出て、後部のドアの前で直立の姿勢で彼女の到着を待っていた。僕たちはゆっくりと、別れを惜しむようにその車へと歩いていく。いや、別れを惜しんでいるのはきっと僕だけだろう。彼女にとって僕などたくさん存在する凡庸な人間の一人にすぎないのだから。

「あなたは自分のことを過小評価しすぎです。少なくとも私にはあなたは必要な存在です」

思考は簡単に読み取られていた。彼女に隠し事など通用しない、でもこの思いを隠すつもりは最初からなかった。

必要な存在と言われた。でもそれは今現在だけだろう。後何年か時が経てば、僕は全く必要とされなくなる。彼女は何よりも速く、何かに囚われることも無く、思考を繰り返すことで脳内を急速に進化させていく。僕は追いつけない。彼女のその後ろ姿すら捕らえることは出来ない。圧倒的な能力差を埋めることなど出来ない。僕も、他の人間も、この世界ですらも。天才である彼女以外のものはただの残像にすぎない。

「また会う機会があると思うわ」

「うん、その時を楽しみに待っている」

「お元気で」

「君も。体にはくれぐれも気をつけて」

「お気遣いありがとう」

車へ向かって彼女は一人で歩き出した。僕は立ち止まって一歩一歩遠ざかってゆく彼女を静かに眺めていた。愛しいと思う気持ちを必死に抑えつけながら。

ふと彼女は車の前まで来ると僕の方へ振り返った。そこには幼さの残る満面の笑顔があった。躰の形状からすればごく自然な笑顔だったが、僕はそんな彼女の表情を久しぶりに見たような気がした。

地面に転がるセミの死骸を眺めてみた。目的を果たし、死んでいった彼ら。全てのものは目的を持って生きている。それを果たすと人間もやはり死ぬのだろうか。

光速に進化を遂げた彼女はもうすぐその目的を果たそうとしているように見えた。この世界に生を受けてまだ九年しか経っていないのに。僕は彼女の未来を、ただ祈ることしかできなかった。

（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。文学というジャンルで初めて投稿してみました。

簡単にいえば天才の彼女と凡人の僕との話です。思考の速度の違いから、互いの考えに大きな隔たりができて、恐いと感じると同時に彼女に対して好意を抱いている。そんな主人公を描いたつもりでした。

理解し辛かったと思いますが、何かを感じていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514b/>

光速で進化を遂げる彼女、僕はただの残像にすぎない

2010年10月8日15時16分発行